

漫才とコントの比較分析 ーウォルトンのごっこ遊び論を用いてー

宇田川 直哉

テレビや舞台等で活躍するお笑い芸人は、主に漫才やコント等の笑芸をネタとして披露する。それらネタを用いて競い合う場として、賞レースと呼ばれるコンテストが存在する。特に漫才の賞レースにおいては、コントと比較したうえで「漫才としてはどうなのかな」と審査員がコメントしたり、優勝者の作品について、漫才なのか漫才じゃないのかという論争が起きたりといった事例が存在する。これらを受け、漫才らしさ・コントらしさとは何かを明らかにすることが本研究の目的である。

漫才およびコントを扱った先行研究においては、それらの笑いの構造を分析し、明らかにするものは数多く存在する。一方で、漫才らしさ・コントらしさについて双方を比較しながら分析する研究は僅かであり、またいずれにおいても分析手法の提案を試みるに留まるものであった。それらの先行研究を受け、本研究においても漫才らしさ・コントらしさの分析手法の提示を試み、新たな視点としてウォルトンのごっこ遊び論を用いることとした。

ウォルトンが提唱したごっこ遊び論は、表象的芸術作品を含む、様々な想像活動を子どものごっこ遊びになぞらえて扱うことで、虚構を分析する理論である。ウォルトンによれば、ごっこ遊びにはそれを促す事物(表象体)と、表象体を成り立たせるための取り決め(生成の原理)が存在する。

分析対象は、それぞれ漫才・コンテストの賞レースである「M-1 グランプリ」と「キングオブコント」の過去 4 年間において優勝者が披露した作品、そして審査員から否定的な言及を受けた作品を合わせ計 17 作品とした。分析に際しては、対象作品が観客に虚構的真理を提示しているかどうか、二重構造のごっこ遊びが行われているかどうか、聴衆への脇台詞が存在するかどうかの 3 点に着目した。

分析の結果、全ての対象作品において虚構的真理が提示されており、漫才およびコントをごっこ遊びとして扱うことは可能であると思われた。二重構造のごっこ遊びについては、漫才らしさの特徴となりうることが示唆された。また、聴衆への脇台詞の有無に関しては、漫才とコントの違いがはっきりと見られた。以上の分析によって、漫才らしさ・コントらしさの明示について一定の成果は見られたと思われる。一方で、漫才とコントの境界線を明らかにするには至らなかった点は今後の課題となる。

(指導教員 横山幹子)